

## 第76号 (1975年5月)

### ねたむ神

「あなたの神、主は焼きつくす火、ねたむ神である。」

(申命記四の二四)

聖書は、一貫して神の独一絶対性を述べる。モーセの十戒に始まる律法の基礎は、すべてこの神の独一絶対性に置かれる。唯一絶対のヤハウエのほかに神はない。他のすべては偽物である。秋霜烈日というか、峻厳無比というか、その最も代表的な言葉がこれである。

神は、「焼きつくす火」であるという。然り、不正と不義、すべての虚偽を赦すことができず、これに対して徹底的に怒り給うのが、火の神である。真義に在し給う故にである。

ただに怒るだけではない。不義を怒ると同時に、義なる唯一の神以外のものに顔を向ける人間を、二心の者として激しく嫉妬する神でもあるという。神ならぬものを神として拝する、そこから人間とこの世の一さいの過誤(罪)が生じたのである。自らに似せて創造した人間に対する愛が、深く強ければ強いだけ、人間の離反を神は赦すことが出来ないのである。神の嫉妬は、愛の独占性、絶対性の最も深刻な表現である。

生命をかけて愛して見よ、しかして、己れに一点の非なくして、愛する者に逆かれてみよ、そうすれば、神の愛の何たるかが少しはわかるであろう。(半田)

## 第77号 (1975年7月)

### 最後の勝利者

いまの世で、どんな不幸な状態、蔑まれ、辱かしめられる状態にあろうとも、最終の勝利はわれらにあるとの確信が、私たちクリスチャンにある。

この確信は、観念でも、妄想でもなく、それがキリスト者、非キリスト者を分別する鍵である。

聖書が記録するイエスの最後の時、誰が彼を神の子キリストと信じたであろうか。彼が侮蔑と嘲笑のうちに十字架に上げられる時、この世に信ずる者は一人もなかったのである。

しかし、唯一人イエスは、万物の創造主、支配者、最終の勝利者なる神を父と信じ、すべてを委ね給うたのであった。

数日後、使徒たちを中心として、イエスの神への信頼は、聖霊の働きとして地下水のような活動を開始する。そしてついにこの世に絶対権を誇るローマ皇帝をも従わせるに至る。

今日、再び不信が地上に満ち、ローマ的力が世を支配しつつある。

いま、地上にあるすべての者は、イエスにつくか、ローマにつくか、二者択一の道

を迫られている。

私たちは、最終の勝利者への道をどう歩むべきか深く銘記すべきである。

(半田)

## 第78号 (1975年10月)

### 後世への最大遺物

「時は夏でございませし、処は山の絶頂でございませす。」これは、明治二七年(一八九四)七月、箱根における基督教徒第六夏期学校において、内村鑑三先生が、「後世への最大遺物」と題して語られた講演の始めの言葉である。

昭和五〇年(一九七五)八月、私たちは、茨城県笠間市吾国山上において、第一回夏期聖書特別集会を催し、「イエスの受難と復活」を学んだ。東京、群馬、茨城県内の各地から、台風六号の吹き荒れる山上へ、一六才より七三才の老若男女二四名が集められた。自ら集まったのでなく、まさしく見えざる糸によって、一人一人が、ここに集められたのである。

この中には、知恵のある者、権力のある者、身分の高い者、すなわち世に知られる者はほとんどなく、この世の知者、強者有力者の目より見れば、なきに等しい者たちであった。

しかし、ここにて語りしこと、ここにて交わりしこと、ここにて願い祈りしことは、ひたすらに主イエス・キリストの生涯と、そのみ霊の注がれんことであった。山は高くなく、会期は長くなかったが、われらに勇気が与えられ、希望と歓喜は内に静かに燃えるのを禁じ得なかった。「勇ましく、誠実にして、高尚なる生涯」が内村先生の言われるキリスト者の生涯ならば、私たちはそのように生き、その足跡を後世に遺したく切に思う。

(半田)

## 第79号 (1975年12月)

### 預りものは返すもの

あなたは施しをする場合、右の手のしていることを左の手に知らせるな。(マタイ六の三)

近頃は、福祉の思想も大分行きあたり、「くれてやる」「恵んでやる」式の考え方の人は、大分少なくなったように思う。しかし、「施し」について、どれだけほんとうの意味を理解しているか、イエスのみ言葉について考えてみたい。

右手のすることを、左手に知らせないことなど、一人の人間に出来ることではない。

しかし、イエスは、知らせるなどいい給う。この教えは、同じマタイ六章一九節以下の「天に宝を積み」の教えと合わせると、非常に明瞭である。「あなたの宝のある所には、心もあるからである」といわれる通り、「施し」は、人間を人間の上に優越させる。優越とは、形を変えた傲慢であり、人間の罪の元兇である。

もともと人間が持っているとは錯覚している知恵も、力も、財宝も、すべて天与のもの、平たくいえば「預りもの」である。預りものは、返すものでこそあれ、わがおの顔に「くれてやる」などといえる権利は、世界中の誰にもないのである。(半田)

## 第80号 (1976年1月)

### 年改まる

新しき年は来た。一九七六年は、東の空より昇る太陽と共に、日本にも、中国にも、ヨーロッパにも、アメリカにも来た。時々刻々は、常に正確に過去を棄てて、未来へ向う。泣く者にも、笑う者にも、急ぐ者にも、止まる者にも、時は公平な支配者である。実に一年を一くぎりとして、一さいが改まることは、生きとし生ける者にとって大いなる恩恵である。

一九七五年が終り、一九七六年が来る。この何の変哲もない時間の連続の中に、何人も手触れず汚すことのない新しい一年が到来する。この壮大な時間のドラマの前に、われらは神の大いなる経綸を感じ、深き感謝と畏敬の念を覚える。

新年ほどに、日本人が神に近い時はないのではあるまいか。日頃あらゆる権威に反抗する若者も、この日ばかりは、神妙に初参りをし、昇る初日に合掌する。例えその目的が、家内安全、商売繁昌にあらうとも、過ぎし一年を省みて、おのれの無力を感じ、人の思いを超える何ものかに祈る心を笑うことは出来ない。しかし、小さな自己の利益に奉仕するものが神でないことは余りに明白である。

年改まる。この日、われらは全宇宙を創造し、全世界を支配し給う真の神のみ前に額づく。これを第一歩として、平安と希望と勇気の一年は始まるのである。(半田)

## 第81号 (1976年3月)

### 世界を変える大事業

復活はあるかないか、あるとすればいかなる形でか、これに対する意見、批判は山のようにあるであろう。しかし、議論や詮索は余り意味を持たない。重要なのは復活のもたらす効果である。イエスの復活によって何が起り、いまなお何が起されつつあるかである。

弟子たちは、復活のイエスによって、全く別人に変えられた。しかもその後二千年の間に同様の人間が無数に輩出した。彼らは一様に新しくされ、強くされ、賢い人となった。

復活は理論ではなく事実であった。事実である故にこれに力があつた。この力を与えられた者は、暗黒から起ち上り、死を超える強さを持ち、この世の真と偽を見分ける者となった。復活のイエスは、個人を変え、社会を改造し、世界に大いなる希望をもたらした。復活のイエスに会って、彼らは始めて生前のイエスの教えの深い意味を理解し、十字架の秘義を悟ることができた。

日本も世界も、腐敗、墮落その極に達しようとする今日、復活のイエスに会うことこそ最重要であり、急務中の急務である。

「復活のイエス」、然り、「霊なる生けるキリスト」に会うことによって、われらは世界を変える大事業に参加するのである。これによって、われらはすべてに勝つことが出来るのである。

(半田)

## 第82号 (1976年5月)

### 無能力宣言

彼は先には、神の姿であり給うたが、神と等しくあることを棄て難いことと思わず、かえって自分を空しうして同じ形になり、奴隷の姿を取り給うたのである。そして人の様で現れた彼は、自ら謙り、死に至るまで、然り、十字架の死に至るまで父なる神に従順であり給うた。(ピリピ二、六～八塚本訳)

イエスの十字架は、神の敗北であり、神の能力の否定である。万能の神が、何もなし得ない無能力者となることによって、神は人間以下の立場に立たれたのである。

イエスの十字架のとき、神は何もなさらなかった。イエスの血の祈りと慟哭にも耳を傾け給わなかった。機会は何度かあつた。しかし、最後まで神は手をさしのべず、言葉さえかけ給わなかった。イエスと神との間に完全な断絶があつた。あわれな神の子羊、この世は完全に神に勝つた。完べきな勝利の凱歌が、その日エルサレムの空をどよめかしたことであろう。

十字架は死であり、完敗であり、絶望であつた。然り、死者、完敗者、絶望者にどうして自ら立つ力が残されていよう。あゝ、イエスが生きかえり給うたのは、神のみの、神お独りの御意思による。私は思う。かの日、少しばかりあると誤認する能力にすぎる私を、徹底的に砕き給うた御方が、血みどろの十字架のイエスを示し給うたのであると…。私はいままでも、これからも、とこしえに無能力者である。

(半田)

## 第83号 (1976年12月)

復活し給いしイエス・キリスト

宇野 輝

「深山木のその梢とも見えざりし

桜は色にあらわれにけり」

という古歌があります。これは今から四十年も昔、私の信仰の恩師であられた原田美実先生が「大和心と福音」という御著書に採りあげておられる歌で、源三位頼政の歌とのことです。復活のあしたを思うとき、今もなお、折に触れて口誦む好きな歌です。深い山の中で、平素はどの木が桜か、こぶしか解らない。しかし臆て期が来て萬物よみがえる春になると、吹きあげる谷風にゆれながら、まわりの新緑の中で、ひときわ鮮かに咲く山桜！そのすがすがしき、あゝ、こんな所に山桜があつたのかと思います。

「山はこれ青々、花はこれ紅(くれない)」という詩句がありますが、少年時代を四国の別子銅山の山の中で遊びくらして育った私は、還暦を越した今、自然の豊かな教訓が思われます。

山桜もそうですが、早春の谷川の崖つぷちに咲いた藪椿が、ポトリ、ポトリと水に落ちて、浮きつ沈みつ流れてゆく美しさ等は、幼心に焼きつけられた思いです。世の人に知られることもなく、咲いては、散ってゆく花の美しさ。独り山桜に限らない、平素は人に踏まれる道ばたのタンポポも、枯草のかげのすみれも、与えられたそれぞれの個性をもって、つつましく、精一杯に讚美を創り主に捧げる。かくもあれかし、復活のあした！と思うのです。

今日は、そうした思いで、イエス様の復活について学んでみたいと思います。

コリント人への手紙、I・十五・1-11。

マルコによる福音書、十六・1-8。

新約聖書中にイエス様の復活に関する有力な二つの証言がある。パウロの手紙のコリント人への第一の手紙の十五章1-11と、マルコ福音書の十六章1-8である。両書の成立時代から言えば、コリント第一の方がやや早く、紀元五六年頃エペソに於て。マルコ福音書は紀元六四年頃から七〇年頃であろうか。多分ローマに於て成立したと思われる。そしてマルコ福音書の本文は、もともと十六・8を以てプツツリと尻切れとんぼ式に終っていて、9節以下は後世の付加である。有力なテキストにはないとの由。

御承知のようにイエス様の御生涯は、十字架と埋葬をもって終らなかつた。四つの福音書はいづれもイエス・キリストはよみがえり給うたと証言しています。しかも四つの福音書中最も古く、又資料として信頼されるマルコによると、イエス・キリストの福音宣教活動は、葬られたイエス様の空虚であつた墓を見て、よみがえり給うたと信じた信仰から開始された。そして私達が注目すべきことは、このキリストの復活ということは、イエス様の御生涯の附録記事(事件)ではなくして、受難記事の、独り受難記事ばかりでなく、福音書全体の結論であり、十字架と共に福音の核心であるということ。もしも復活が起らなかつたら、イエス様の御生涯は十字架の敗北死であり、人類の救済史(神様の御計画も)十字架上で坐折し、キリスト教は人類の福音として起らなかつたと断言できます。パウロは、このことを「もしキリストがよみがえらなかつたとしたら、わたしたちの宣教はむなしく、あなたがたの信仰もまたむなしい」

と言い、「もしキリストがよみがえらなかつたとすれば、あなたがたの信仰は空虚なものとなり、あなたがたは、いまなお罪の中になることになる。そうだとすると、キリストにあつて眠つた者たちは、滅んでしまったのである。」とのべています(コリントI・十五・14、17、18)。

曾て本誌26号「イエスは死人の中からよみがえられた」-50号にも書きましたが、「福音は二つの焦点をもつ楕円形である。その一つは十字架による罪の贖いであり、いま一つは復活である」と言われます。多分ハルナックの教会史の中の言葉であつたかと思ひます。まさにその通りで、この二つの焦点は楕円形の円環内で、固く結びついて活動している。キリスト教の起る歴史的契機は、聖霊の啓示による素朴なイエス様の復活信仰から起つている。そして十字架の贖罪信仰は、復活のイエス様に接した驚きの信仰の中から起つている。行伝の中でペテロはそれを「このイエスを、神はよみがえらせた。そして、わたしたちは皆その証人なのである」(二・32)と証言する。イエス様のかかり給うた十字架の意味は、弟子達には最後まで理解できなかつた。十字架贖罪の意味も、イエス様の御生涯も、復活のイエス様に接し、復活信仰の啓示の光に照らされて、救い主としての意味が理解されるに至つた。十字架の死がなければ、復活は起り得ないし、復活がなければ、十字架の死は徒死と滅びにすぎない。

ただ、ここで大切なことが二つあると思ふ。第一点は、私達が聖書を読んでいて、当然のことながら、“御子イエスがよみがえられた”ということは、本来、この地上に復活されたということではない。そういうことでは意味がない。罪と結びあつた死が克服されて、霊化された、或は、罪と死の(審きの)清算済として、神の国の本来の御姿になられたということである。ただ、深い御いつくしみの故に御姿をしばし私達の間に現わして下さつた、ということである。

第二点は、復活のイエス様に接するということは、科学と史実を超えたことである。

「聖霊によらなければ、だれも「イエスは主(キュリオス)である」と言う(告白)ことができない」(コリントI・十二・3B)。復活し給ひしイエス様を、人が自らと切つても切れない我が罪の贖い主・イエス・キリストとして、全身的に受け入れることは、恩恵による聖霊の啓示によることである。外側の史実を踏みこえた信仰の体験領域に属することである。

この点について私自身長く疑問を感じていた。パウロと、ペテロをはじめとする弟子達の復活体験のあいだに一見著しい相違があるように思われた。ペテロをはじめとする弟子達の復活体験が、十字架上で死んで葬られたはずの(弟子達にとっては)イエス様が再び彼等の間に現われて、共に歩み、話しかけ、親しく食事すらされる姿を、彼等弟子達が肉の目で見て信じた。地上に現れて下さつたイエス様の外側の、肉の体験から霊的復活信仰へ→。果してストレートにそうであつたのか?。これはあとでもう一度検討する。

一方、パウロの復活体験は(パウロにとってこれは回心の体験でもあるのだが)きわめて劇的に、最初から肉とは断ち切られた、霊の、天上の、復活のキリストの顕現に

接した。霊の体験が旧きパウロを焼き尽くし、一変せしめて、復活信仰へ。

なお、ここでNDT註解のウェントラントによると、コリントIの十五章3-5「わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであった。すなわちキリストが、聖書(旧約)に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、そして葬られたこと、聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえったこと、ケパ(ペテロ)に現われ、次に十二人に現われたことである」。「この福音信仰の土台をなす「言い伝え」(伝承)は、言語研究が示すところでは、明確な形を持った告白形式のものであり、おそらく原始教団に由来するキリスト教の使信を簡潔にまとめた最古の定式である」(P284)とある。そしてキリストの十字架から、この手紙までは二〇年の至近距離にある。しかもこの最古の定式は、パウロの発想ではなく「わたし自身も受けたこと」であると説く。さらに6節で「そののち、五百人以上の兄弟たちに、同時に現われた。その中にはすでに眠った者たちもいるが、大多数はいまなお生存している」。多くの生(いき)証人達がいるんだと説く。パウロは受け継いだこの最古の告白定式の確信を、その裏打ちとして、9節に彼のダマスコ途上のキリスト顕現の信仰体験を告白する。6節以下は定式ではないが、この僅かな切は歴史を変える重大な証言なのである。カール・バルトの「死人の甦り」(広安孝夫氏訳・復活社)に指摘する所の再説は、本誌28号に記した故繰返さないが、多くの示唆を含んでいる。パウロが回心後、この伝承を受けたのが、そう遠くないことを考えると、この告白定式の復活信仰が、原始教団の中に十字架後きわめて急速に根を張ったことが解る。そしてイエス様の十字架の意味等は、パウロがローマ人への手紙以下で深刻に解明しているが、それ以前にすでに「聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえったこと」。すなわちイエス様の贖罪死信仰と復活の意義の自覚が確立されている。告白は同時に宣教である。ガリラヤの素朴な弟子達は、宣教の根拠を彼等の正典である旧約聖書に依っている。驚くべき信仰の変化、飛躍である。それは又、ユダヤ教における民衆のメシヤ信仰と聖書(メシヤ聖句抜粋等)のした地の背景を考えさせる。

次に注目すべきは「現われる」という言葉である。「ケパに現われ、十二人に現われに、五百人以上の兄弟たちに、同時に現われ、ヤコブに現われ、すべての使徒たちに現われ、そして最後に、いわば、月足らずに生れたようなわたしにも、現われたのである」。同じ「現われた」について、ルカ二四・34。行伝十三・31。九・17、二六・16参照。この「現われる」が、英語では、appeared.ではなく、was seen.すなわち受身形の(見られた)で、キリストが「ケパに見られた」(其他以下同じ)となる。ウィリー・マルクセンという学者が「イエスの復活の意味」(新教)中の「史のおよび神学的問題としてのイエスの復活」という論文の中で、(P24)オフセー(όψαω)すなわち(όπαν)=見るの不定過去・受動態)について、

「ところが、(オフセー)という受動態の形の場合、形は受動態でも、意味は能動であることがありうる。とすると(キリストは)現われた、乃至は、自らを見せた、ある

いは、自らを示した、と訳しうる。第一の場合においてはいわば証人たちの行動に言及されている(彼らは見る)。しかし他の場合には、キリストの行動がでてくる(彼は現われた)」。つまり訳し方で内容の食い違いが生れうる。更に「第三の可能性は、受動態を(ユダヤ教に流布されていた)神名をわざと避けて表現する一つの形式として理解しようとするものである。その場合には、こう翻訳できるであろう。「神が……見えるようにさせて下さった」と。

少しくややこしいが、示唆されるところ多い勉強なのであえてしるした。そこで私は「あとでもう一度検討する」と言った問題に戻る。福音書に多くある、ペテロをはじめ、原始教団の人々の見た復活の体験と、ダマスコ途上でパウロの体験した復活のイエス・キリストと異質のものであろうか。

最初に一つだけ、ノー・と否定しておきたいことがある。それは、(キリストが)見られた、とする場合に、イエスの復活と言っても、それらは結局、異質な精神状態における、単なる人間側の幻影(ウイジョン)に過ぎないのではないかとの議論である。なるほど初期のキリスト教等より遙かに大勢力であった、当事の中近東の多くの密義宗教の祭儀や救に(例えばミトラ教等)人間の恍惚状況や神人合一の聖化等があったことは事実である。しかし自然宗教とは異なるヘブライ宗教の厳しい人格宗教の伝統は、かかる救を一しゅうする。たとえば予言者達にも一種の恍惚はあったが、その背後には圧倒的に臨在する、ヤハウエの人格的行動性、“生ける神”の言葉は、密義宗教のそれと類を異にする。原始キリスト教も又このヘブライ宗教の伝統を豊かに受け継いでいる(コリントI・九・15。行伝四・19)。

人格的客体のない人間の側のみの主観的幻影は歴史を動かし改造しないのである。

問題に戻る。元来ヘブライ思想には救いについても霊肉分離(肉体はいやしいものと見なす)の思想はない。罪の問題の解決と共に肉体も潔い救に入るのである。抽象的観念ではなく具体的実体なのである。そこで「オフセー」が、キリストが弟子達に「見られた」であっても、「現われた」「自らを見せた」「自らを示した」或は「神が……見えるようにさせて下さった」、いづれであっても、行動した客体(復活し給うたイエス様)があったことに変わりない。ただ私達は、パウロも多くの初代教徒の人々の証言から、地上のイエス→十字架→復活のキリストについて聞かされていたにちがいないと思うのだが、この福音の核心の問題について、パウロ書簡より後に書かれた、福音書に見られるような復活のイエス様の姿については、多くある彼の書簡に一言も言及がない。唯「現われ給えり」との事実のみを主張する。更に注目すべきことは、(パウロは信徒の一部の人々から勝手な自称使徒であると中傷を受けたのであるが)自らの使徒職の権威の主張を、－その根拠を－この「キリストが現われて下さった」という点で、他の使徒達と内容的に同一視している点である(コリントI・十五・7・10。II・十一・5。十二・11)。「かつてはキリストを肉によって知っていたとしても、今はもうそのような知り方をすまい」(コリントII・五・16)。この「肉によってキリストを



知るとは、パウロが地上のイエスに面識があったという意味ではない。反って、そういう優越感を持っている人々、或は使等達に対する、パウロの鋭い反撃である。靈的にキリストと交わるのでなければ無意味であるとの主張である。私達は福音書の中には、ペテロ以下の弟子達の、パウロに於ける程鮮かな回心の記録を見ることができない。しかし「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」或は「わたしは、キリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」(コリントⅡ・五・17。ガラテヤ・二・19、20)。たとえ福音書中に弟子達の回心の記録はなくとも、福音書のおわりから、行伝の一章―五章を注意して読むならば「旧きは過ぎ去り、見よ、新しく」された弟子達の新しき生命に溢れた実証的記録を読むことができる。勿論私達は回心や、復活信仰が、こうでなければならぬ等の画一的な枠を設けることなどできない。旧き肉眼から、新しい霊眼へ(靈的視野の展開)、この連続性を断ち切るものは、十字架の贖罪死と埋葬と、復活の力であるが、同時に私達にこの衝撃(契機、或は導きでもよい)を与えるものは、聖霊による啓示である。この意味で、きわめて特異な様相ではあるが、ペンテコステの聖霊降臨は、原始エクレジヤの誕生に大きな始動力であったと思われる。そして福音書における弟子達の肉の目による復活のイエス体験は、それまでの心の準備、＝つなぎの役を果たしたものではあるまいか。言いかえると信仰の目の開かれた後の、主・イエス・キリストの再発見の記録ではあるまいか。マルコ十六・1―8の空虚な墓までは、ギリギリの目撃された史実である。これを超える復活の「主・イエス・キリスト」は、ペンテコステ後に、或は聖霊の啓示に裏打ちされた靈的信仰体験の記録であると思うのである。このことについて豊かな暗示を示す物語に、ルカ福音書二四章のエマオの途上のイエスの顕現がある。

人間の向う死の悲しみに、甦りの生命であるイエス様の方から近づいて来られたということは、福音の本質をきわめて象徴的に表わす物語であるが、「しかし、彼等の目がさえぎられて、イエスを認めることができなかつた」(16)。しかし、「聖書(旧約)全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかし」てくださって、共に宿にいら「パンを取り、祝福してさき、彼等に渡しておられるうちに、彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかつた」。(即ち、生命のパンをとり、喜んで彼等を祝福して、ご自身を裂き渡しておられるうちに(象徴行為)彼等の目が開けて、となる)。さらに、彼等は互に言った、「道々お話になったとき、また聖書を説き明かして下さったとき、お互に心が内に燃えたではないか」と。喜びに溢れた彼等は、「そして、すぐに立って」夜路の旅を「エルサレムに」ひき返すのである。

この美しく、又極めて蔭影にとんだエマオのイエス・キリストと、さらには弟子達の結びの会話を通じて、甦り給いし、イエス様を、わが主・イエス・キリストとして告白し拝するの、外側の、肉の体験から靈的復活信仰へ→ではなくして、恩恵による霊の啓示に接し、霊眼ひらかれた者の信仰告白であり、イエス・キリストの再発見、再確認である。朝まだき園において、復活のイエスに呼びかけられて「ラボニ」と応

答したマリヤにも、(ヨハネ福・二〇・11-18)疑がうトマスのお物語(ヨハネ福・二〇・24、25)にもこの蔭影が感じられる。私は彼等の復活信仰の確立の契機は、且てラビとして親しく師事した人間イエスの復活であるよりも、聖霊の啓示により霊のキリストに目開かれて後に、「主・イエス・キリスト」こそ、外ならぬ地上にありし日の、あのイエス様であったと信ずるに至ったと思うが、どうであろうか。唯、私達はこう言うことができる。同じ聖書を読むにしても、モーゼや、イザヤや、エレミヤは、現代に尚指針を与える違大な予言者であるが、過去の人である。イエス様は違う。今日も生き、今も共にいまし給うイエス様を私達は、福音書の中に裏打ちとして読む。読むことによって深められるのは、過去のイエス様ではなく、現在、今、私と共にいて下さるキリスト・イエス様である。同じ認識が、弟子達のイエス・キリストの魅り信仰の問題にも投影され得ないであろうか。目啓(ひら)かれた時、目撃は啓示として信仰の現在となる。私は福音書にある復活記録は、聖霊の啓示に目ひられた者の信仰の裏打をもつ、リ・フレックス(反映・映像)の記録であると思う。

当事も今も、イエス・キリストの復活とは、その十字架と共に、常に現在が問われる問題なのである。  
一九六七・七・六。

—七四・四・二八、於水戸商店会館の原稿 再考加筆—。

註、「マラナ・タ」コリントI・十六・22。

パウロの手紙にあるこの言葉ほど、初代教会の主の復活と来臨待望の証しなる珠玉の祈りの言葉はない。「われらの主よ、来りませ」紀元五十六年頃、ギリシャ語圏内のコリント教会に宛てられたパウロの手紙の中に、アラム語の祈りの言葉が、そのまま送られているということは、この言葉が、アラム語の圏内で発生し、五十六年頃には、既にギリシャ語圏内の教会で(復活の事実と)再臨の希望の祈りとして、広く教会員に通用していたことを示す。原始エルサレム教会に由来するのではないかとと言われる。

第84号 (1977年2月)

祈らぬ先に神知り給う

キリスト教は、いろいろの効用を人に与える。曰く平安、曰く幸福、曰く勇氣、曰く希望等々、たしかにその何れもが事実である。しかしこれらは、何れも信仰の結果、又は果実であっても、信仰者の実体、その根幹ではない。キリスト教の本質は、人をして神の前にひざまずかせ、祈る人とならしめるところにある。研究や講義のみをする人は、教師や学者ではあっても、キリスト者ではない。

キリスト者は必ず祈る。祈りなきキリスト者は、キリストの僕、弟子たるキリスト者ではない。イエスは祈りの人であった。彼の生涯は祈りと共にあった。祈りは、人

と神を結ぶ唯一の生命の道である。祈りによって、人は神と相まみゆることができる。祈りによって、人は始めて神を仰ぐ、神は必ず祈る者を知り給う。すでに神は、祈らぬ先から人の心を知り給う。しかし、祈らざるときには彼はこれに応え給わない。生命の道が断たれているからである。??、祈りによって、人は何人とも関係なく、何人の助けなく、自由と独立を与えられる。いかなる障害も、もはや彼の行手を妨げることはできない。祈りによって、すべての障害が消え去るのではない。又、祈りは必ずしも富貴、健康を人に与えない。癒えんことを願って、必ずしもすべての人が癒されるとは限らない。しかし、人の知恵では到底解決することの困難な問題でも、祈る人には必ず解決が与えられる。信じて祈る人には、その困苦障害を越え、死をも、恐れぬ力が与えられる。もはやキリスト者に越え難き障害はないことを知って、祈りつつ歩む者に、平安はたちどころに満ちあふれ、希望と勇氣は雲の如くに湧き起るのである。「祈らぬ先に神知り給う」これを教えるのが真のキリスト教である。(半田)

## 第85号 (1977年5月)

### 敗戦三十二年

戦後三十二年、日本が明治維新以来、これ程長い期間、戦渦に巻き込まれない時はない。一八九四年日清戦争、一九〇四年日露戦争、一九一五年第一次世界大戦、一九三一年満洲事変、一九四一年第二次世界大戦、一九四五年敗戦、それぞれの始期の間隔は、十年、十一年、十六年、十年である。日本は実に四七年の間に五回の戦争を経験して来たのである。

第二次世界大戦では、壊滅的痛手を受けたにもかかわらず、戦争を知らぬ世代が増えるに従って、敗戦を経験した多数の人たちすら、奇妙な回想に更けるこの頃である。黒い悪魔の爪が、密かに磨かれつつある不気味さを思う。

あえていう。今日の平和は、夥しい悲惨な犠牲の上に築かれている。ところが、英霊顕彰という偽装された戦争礼讃が、国家行事の中央にあぐらをかくとき、犠牲は美化有用化され、称讃され、再びこれを強いる者の虚権を、栄光の座にまつり上げることになるのである。

戦争をショウと化して茶の間に持ち込むテレビの映像、それを見る若者たちの暴走族的スリル感への共鳴を聞く時、日本亡国の足音が、次第に高鳴りつつ迫るのを覚える。

敗戦三十二年、「平和」をどう守るべきか、いまこそ、絶対非戦のみ旗の前に、われらは、自らの責任で起つべきときである。(半田)

## 第86号 (1977年9月)

主にあつて誇れ

—誇る者は主を誇るべきである—

(第二コリント一〇・一七)

原文はまた、「誇る者は、主にあつて誇れ」とも読むことができる。(文語訳、新改訳、欽定訳英訳など)引用句での「主」はもちろん、イエス・キリストをさす。

もとの句は、多少表現を異にするが、エレミヤ書九・二三―二四からの引用である。

人間的には誇るべき多くのものを持ったパウロが、イエスとの出会いにおいて価値の転倒を経験し、「わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇りとするものは、断じてあつてはならない」(ガラテヤ六・一四)とか、「誇るなら、イエスの力が宿る様に自分の弱さを誇ろう」(第二コリント一一・三〇、同一二・九など)と告白する。

自分の知恵や力や富などを誇らず(エレミヤ九・二三)、十字架を誇りとし、或はキリストによって自分の弱さを誇る。

正に、誇る者は主にあつて誇れである。

ギリシャ語では僅かに六字(ホ デ カウコーメノス エン キュリオー カウカツソー)の短かい句であるが、人が誇りとするべきものの対象と、その動機とは信仰的であるべきことを教えられる貴重な聖句の一つである様に思う。(桜井)

第87号 (1977年11月)

罪人の私をお赦してください

あなた達は何よりも先に、御国と、神に義とされることを求めよ。(マタイ六・33)

いまの世に一番欠けているものは義である。義とは、神の公義であり、人の世のご都合主義の義ではない。見よ、ロッキード事件に象徴されるように、権力の座にあるものが、いかにおのれの欲を公義の如く偽装しているかを！日本医師会の義と患者の義が相容れないのは、企業家と労働組合の義が調和しない以上である。

「義人はいない。ひとりもない」とパウロもいう。人は、常に自己の立場を正しきもの、すなわち義なるものとして主張する。かつて正義の名によって起こされなかった戦争がないように、人は絶えず自己の正当性を主張してやまない。

「神に義とされる」とは何か、まず神の絶対義に在すことの認識から始まる。神のみが義に至し給う。神のみ前にいかにおのれの義が義にあらざるものか、むしろ、徹底的に人間は不義なるものであることの痛烈な認識がなければ、神を義とすることはできない。まして絶対義なる神のみ前に、義とされるどころ全くなき己れに気づく時、私たちは愕然とし、徹底的に打ちのめされるのである。「罪人の私をお赦してください」(ルカ十八・13)との真底より砕かれた一語を持たずして、真のキリスト者は誕生しな

いのである。

十字架は、単なる神の義の象徴ではない。義なる神の子を十字架上に追い上げ、これを逆殺した人類の罪の総決算であり、頂点である。と同時に、この事件を通して、我も汝も全人類義なるものは一人もないことが明白にされたのである。十字架を仰がずして、神に義とされる道、然り、人が真に神の子となるの道は他になきことをわれらは知るのである。

(半田)

第88号 (1978年2月)

渡部仁兄の御昇天

服部 洋司良

渡部兄は、結核患者として三十年間も晴嵐荘に入院しておられた、無教会キリスト者でした。私は、同じ無教会キリスト者として晴嵐荘に永く入院しておられる永田収兄を通じて、渡部兄入院中の後の十年間にお会いする機会が与えられ、極くたまにはありましたが、晴嵐荘にうかがっておりました。初めてお会いした頃は、比較のお元気で、たしか、外気で療養しておられたように記憶しております。その後、病は重くなり、長年ベッドに臥たきりの生活をされました。

三年前に私共の家族が交通事故に会い、特に長女が脳内出血するという困難な状態にあったとき、渡部兄は、長女のために一所懸命祈って下さったのでした。その御礼にうかがったとき、渡部兄は、回復した長女のことを非常に喜んで下さいました。

二年前には、渡部兄の様態が悪くなり、永田兄はじめ、私共は大変心配を致しました。意識もはっきりしない状態で、時間の問題とさえ言われていました。その頃、米子の藤沢武義先生が訪問され、心血を注いでお祈りをされました。そして、数日後、渡部兄は元気を回復されたのでした。

御昇天される約一月前にうかがったとき、衰弱してはおられましたが、目は澄んで輝いており、信仰的な深い喜びをもっておいでのように感じられました。その時は、御昇天のことなど思いもよらないことでありましたが、前にうかがったときよりも、非常に違った霊的な印象を受けたのは事実でした。そして、十月四日ついに天国に凱旋されました。

告別式は、終始、渡部兄を暖かくお世話しておられた晴嵐無教会の諸兄弟によって行われました。生涯を、世間の目に見えないところで苦難と戦われた兄について、永田兄の心のこもった「おわかれの言葉」。司式者安兄の式辞が述べられ、感涙致しました。

私は、渡部兄の御昇天を通して、次のような神様の愛を知ることができました。

たとえ、渡部兄のように生涯病気であっても、必ず喜びと感謝とをもって生きてゆけるところがある。それは、神様が自分を愛して下さっていることを知るところであって、神様を信頼しておれば、必ずそのように導いて下さる。

幸福とは、神様の愛を知ることであって、この世の境遇とは全く関係のないもので

ある。

神様の愛を知れば、心から謙遜になることができる。謙遜になれば、たとえ、自分の境遇が不幸であっても、それを神様から与えられたものとして受入れることができるから、それについて文句を言ったり、愚痴をこぼしたりする必要はなくなる。

渡部兄のような苦難に会ったことがなく、したがって、そのような苦難と戦ったこともない私にも、神様は、渡部兄と同様に従順な魂を与えて下さるにちがいない。それが、私共を愛して下さっている神様の御旨なのだ、と信じるところに希望、喜び、感謝があります。

## 第89号 (1978年7月)

神の国は言葉ではなく、力である。

(第一コリント 四・二〇)

原文の逐語訳は、「なぜなら、言葉の中にではなく、神の国は、力の中に」となる。神の国は、又の訳、「神の支配」とも読める。

福音のことばであっても、それを単に知っているというだけでは力にならない。

聖書を学び、福音に接し、そしてさらには祈りによって、聖霊の力をいただく。その結果始めて私達の心は神の支配される場所となり、いわば、神の国実現への第一歩を踏み出すわけである。

神の国の完成は未来のこととしても、現にキリスト者の心の中には、神の国の初穂が芽生え始めているということができよう。

イエスのみ言葉にも示されている通りである。

「神の国は、実にあなたがたのただ中にある」と。(ルカ一七・二一 塚本訳)

私達は、福音に接し、また聖霊の力をいただくことにより、神が私達を支配し給う様に祈らねばならない。そうでないと、サタンにつけ入るところとなってしまうだろう。

さらには私達は、神の支配が、まだキリストを知らない人々にも及ぶ様にと、そしてやがてはこの地上に神の国が実現されるようにと、絶えず祈り求め度く思う。(桜井)

## 第90号 (1978年11月)

なんとみじめな人間だろう

桜井五郎

なんとわたしはみじめな人間だろう！

だれがこの死の体から、わたしを救い出してくれるのだろうか。—神様、感謝します、わたしたちの主イエス・キリストによって！

(ローマ七・二四―二五イ 塚本訳)

パウロの、ローマ人への手紙全体の流れからすれば、この句のように言ってなげき、また感謝するパウロの心境は、彼が回心を経験する以前のことを述べていると見るのが至当の様である。

そしてキリストに導かれるまでの、私達の小さな経験でも、このパウロの言葉は正に実感として受けとめることができる。

ところで、キリストの福音に接し、その御名を信じることによって、キリスト者とされたあとでは、もはやパウロがここでのべる様な、なげきの気持をいだかないですむのかというと、そうとばかりはいえないだろう。

心の中、あるいは理性では、神の律法に従うべきことが、わかっていながら、それが出来ない。神のいましめを正しいと知りながら守り通せない。

祈っても、求めても中々聖書に示される様な道を歩めない。そう思うとき、やはりパウロのこの言葉ではないが、「タイポロス、エゴー アンスローポス」(なんとわたしはみじめな人間だろう!)と、嘆かずにはおられない。

事実、私自身、なお罪の生活から抜け切れないでいる様な自分を見出し、二十何年間の聖書勉強、信仰生活といっても、それは偽善ではなかったのかと反省させられる時のあることを否認しない。

聖書の勉強をどんなに重ねても、キリストの御霊によって歩む祈りの生活をないがしろにしたら、たとえ、クリスチャンと自称しても、神様はその様な者を見捨てられるのではないだろうか。

そんな恐ろしいことにならない様にと、しっかりイエス様の十字架を仰ぎ、それにおすがりしてゆかねばならない。

自分の力では何もできない。やはりイエス様によりすがって生きるほかない。

自分のみじめさを嘆くパウロも、一方では突然の様に、キリストに対する感謝へと飛躍しているが、これは単なる言葉のあや、表現の転換ではない。

生れながらの人間と、キリストの啓示によって歩まされる人間との間の、正に比較しようとしても比較にならない質的転換のあることを示すものであろう。

みじめな自分の姿をいつまでも嘆くのではなく、キリストを仰いで感謝できる人間とされねばならない。

第91号 (1979年2月)

## 無教会主義と社会福祉

キリスト・イエスの生誕が、人間の社会に果たした役割は、集团的、組織的、因襲的、階層的関係の中に、がんじがらめにされていた個々の人間を、一度ばらばらに解きほぐし、神対私という人間存在の原点に据え直し、神の前には何人も自力で立つことのできない不完全者(罪人)である事実をつきつけ、その罪からの救済が、十字架のゆるし以外に道のないことを指し示した点にある。

ユダヤ教の律法主義は、王、祭司、長老、学者らの政治的、社会的支配階層を温存しつつ、形式的権威(これを教権主義、教会主義という。)によって、真の神と、個々の人間が対面することを遮って来たが、イエスの十字架と復活は、これらの偽りの権威を根本から打ちくだいた。神と人間の直結を可能にしたところに、イエスのキリストである証左があり、ノン教権主義すなわちイエスこそ無教会主義の実践者であると言い得る理由がある。

イエス以来二千年、いまなお集团的、組織的、因襲的、階層的關係からすべての人が解放されているとはいえない。特に心身障害者に対する隠然たる差別と蔑視の事実は、単的にこのことを物語っている。社会福祉は、安価な同情や見せかけの奉仕では絶対に達成されない。奉仕する者もされる者も、全く同一の資格で、むしろ資格などというものなしで、神の前に立つことが必要である。個々人が、自己の罪即ち神の前に不完全な障害者であることを知ることが福祉の第一歩である。

(半田)

第92号 (1979年4月)

幸いだ、貧しい人たち

ああ幸いだ、神に寄りすぎる“貧しい人たち”天の国はその人たちのものとなるのだから。(マタイ五3塚本訳)

神に寄りすぎるほかない弱く貧しい人たちは幸いだという。「寄りすぎる」は、ほかに頼るところがない状態、「貧しい人々」は、現実の貧乏人。協会訳のように「心の貧しい人」に限定されない。「天の国」は、神の支配される場所、空間的に限定された場所ではない。また、死後の世界とのみきめつける必要もない。むしろ「宗教は、現世の不合理から目をそむけさせるアヘンだ」という思想に対する、真向からの「否」の宣言である。

現世で、いま貧乏の人は幸だ、将来金持になって、豊かになるからではない。貧乏のまま、むしろ、貧乏だからこそ幸いだ、というのである。貧乏人を金持にすることが福祉の仕事なら、福音の思想とは根本的に異なる。

治らない障害を持った者が、障害のあるまま、寡婦が寡婦のまま幸いでなければ、この言葉の意味は価値を持たない。

この言葉の一番大切なところは、貧しい故に、貧しくされたからこそ、神に寄りすぎる心を与えられたこと。

反対に、富むことによって、神に背を向ける人間になることが、どんなに不幸なことかわかるであろう。

(半田)



第93号 (1979年7月)

裁くな

人を裁くな、自分が神に裁かれないためである。

(マタイ七1 塚本訳)

人間の本性は自己中心的である。個人的にも集団的にも、自己を離れてはこの世界に何の興味も感じないのが人間である。政治経済、社会の各分野が、いかに自己本位、自己中心的に動いているか、最も自己放棄的であるべき宗教界が、熾烈な自己中心的争闘のつぼと化しているかは、知る人ぞ知るである。

自己中心を裏返せば、自らを神の座に据え、自己以外のすべてを、批判し裁くのが人間の本性であり、本質そのものだといえるであろう。見よ、鳥の鳴かぬ日はあっても、人が人を裁かぬ日は一日もないことを。

然るにイエスはいい給う、「人を裁くな」と。裁くのが本性の人間に向って、「裁くな」と教えられる。まことにムリな注文というものである。しかし、ムリであっても、イエスは裁くなと命じ給う。なぜなら、神に裁かれないために、人を裁いてはいけないのであると。人が人を裁かないためには生れながらの本性を変え、自らを自己中心という神の座から引き下ろし、神を神の正当な座にいまし給う方として仰ぐ以外に道はない。神か人かいずれにつくかの別れ道が、この言葉の背後にかくされている。

然り、人ではなく、神につくためには、まず自己中心の自分を放棄しなければならない。

自己放棄など簡単に出来ないとうそぶく前に、自己中心の自分と血みどろの戦いをしてみると、罪なく十字架にかけられたイエスが、なぜこんなにきびしく教えられたか分かるであろう。先ず「神を仰ぐこと」に一切の基本がある。どんなに立派なことをいっても、いい気になって人を裁いているうちはクリスチャンとはいえない。(半田)

第94号 (1979年11月)

福音と道徳

だれでも、わたしについて来ようと思う者は、まず己をすてて、毎日自分の十字架を負い、それからわたしに従え。十字架を避けてこの世の命を救おうと思う者は永遠の命を失い、わたしのために、この世の命を失う者が、永遠の命を救うのだから。

(ルカ九23～24塚本訳)

イエスが与える永遠の命の道が、この世の道徳といかにかけ離れ、異質のものであるか、最もよき例証となる言葉である。道徳の目ざすものは、あくまで主体となる個人の人格の成長(完成)であって、生れながらの主体の肯定の上に基礎を置いている。

然るに、福音の道は、主体の否定から出発する。「己をすてる」とは、完全なる自己否定の道である。そこにはこの世的な栄光も、満足も、充実もない。あるには、「毎日自分の十字架を負い」イエス・キリストにすべてを委ねて従う姿しかない。そのもたらすものが、悲哀であるか、困苦であるか、離別、迫害であるかは問わないのである。それを嫌うものは、永遠の命に入れて頂くことが出来ないばかりか、一足飛びに滅亡の淵に落ち込む。道徳の道は、この世のいのちを大切に、恥や外聞に逆くことを嫌う。この世の栄光、見てくれの繁栄、その日暮らしの幸福をすてる者にのみ、イエスは、真の幸福、永生を約束されるのである。

(半田)

## 第95号 (1980年3月)

### 目を覚まして祈っていなさい

あなた達、そんなに、たった一時間もわたしと一しよに目を覚ましておられないのか。目を覚まして、誘惑に陥らないように祈っていなさい。心は はやっても、体が弱いだから。(マタイ二六40-41塚本訳)

ゲッセマネにおけるイエスの最後の祈りの時、イエスと弟子たちの距離の遠さを、痛烈に思い知らされる情景である。生命の主、イスラエル(人類)の真の救い主、師の中の唯一の師なるイエスが、迫害の魔手に、いま捕えられようとしている重大なときに、眠りこけてしまう弟子たちの姿ほど、人間の弱さを象徴するものはない。

この弟子たちの姿こそ、私たち一人ひとりの姿そのものではないか。時に厳しく、時にやさしく、イエスが、どれ程不覚で死たちを愛し、導き、育てられたか、にもかかわらず、この師の最後のときに、共に祈ることさえ出来なかった弟子たち、「主よ、生命までも」と忠誠を誓ったペテロさえ、眠りの誘惑に勝つことが出来なかった。

「心は はやっても、体は弱いだから」とイエスはいい給う。まことに、ただの一人も、イエスが世に在し給う間に、目を覚ましている者、ほんとうに目を覚ました者は、いなかった。彼らが、真に目覚めたのは、復活の主に、会ってから以後のことである。その時になって、弟子たちは初めて、「目を覚まして、祈っていなさい」という師の言葉を理解することが出来たのである。眠った目で祈っても、イエスのみ言葉はわからない。目を覚まして、然り、本当に目を見開いて、祈ることが必要である。この世は、誘惑の霧で、一ぱいに満たされているのだから……(半田)

## 第96号 (1980年5月)

### エノクは神と共に

エノクは神と共に歩み、神が彼を取られたので、彼はいなくなった。(創五24)

前田護郎先生が突然昇天された。その訃報を伺った時、私は思わず絶句し、自分の耳を疑った。まさかと思うことが事実であったからである。「先生は神と共に歩まれた。神が先生を取られたので、先生はいなくなられた。」と、私はその時すぐ思った。神がみ旨に定められて取られたのでなければ、どうしてこのことをただの事実として容認出来よう。今日の日本も、世界も、どれほど先生を必要とするか、私ごときが、いまさら喋々するまでもないことである。

学問的なレベルにおいて、最も権威のある聖書講解、歴史、文化、社会を見る視野の広さと深さにおいて、抜群の総明さ、弱者に対するハートのあたたかさ、やさしさは、主に在って決定的な苦しみとかなしみを経験した人のそれであった。先生主筆の「聖書愛読」誌のサブタイトルに、一ひとり学ぶ友に一が毎号誌されている。そのお言葉の通りに、読者は愛読誌からどれ程深い慰めと励ましを頂いたことであろう。

読者は、もはや再び「聖書愛読」誌を手にはできない。しかし、先生は未来永劫神と共に在し給うことを私たちは確信する。「このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている。??」が抜けてる??(ロマ五1) 先生のみ霊とこしえに安らかならんことを!(半田)

第97号 (1980年7月)

独立

世に独立ほど尊いものはない。正義も尊くあり、愛も尊い。しかし、国家にとっても、個人にとっても、独立なくして正義を貫き、愛を完うすることはできない。それほどに尊き独立が、踏みにじられ、売り物にされている事実を、人々は意外と気がついていない。

独立とは何か、文字通り独り立つことであり、他の何者にも犯されず、又犯さないということである。他の何者にも犯されずとはどういうことか、この世の権力、財力、金力の前に自らの節を曲げないことであり、地位や名誉のために操を売らないことである。

独立は、そうした外部からの誘惑や強制に対して、断呼としてこれを払いのけるだけではなく、自らの親しきものからの決別をも含むものでなければならない。

普通、社会的、経済的、身体的と「的」をつけた独立を多くの人はいう。しかし、社会から、経済から、身体(身内を含む)からの独立と「から」をつけた独立をいう人は少ない。社会に縛られ、経済に振り回され、身体に拘泥するところに真の独立も自由もない。子が親から、親が子から、弟子が師から、師が弟子から独立すべきである。さらに社会から、集会から、何よりも経済からの独立を果さねばならない。

実に独立は、この世の一切との決別によって、始めて真固のものとなるのである。

然らば、独立は如何にして達成することができるか。霊の自由を得ることである。霊の自由は、十字架にかかり給いしイエス・キリストを仰ぐことによるのみ達成される。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負

うて、わたしに従ってきなさい」(マタイ一六24)。とイエスはいい給うた。また、パウロはいうた。「主は霊である。そして主の霊のあるところに自由がある」(1コリ三17)と。(半田)

## 第98号 (1980年8月)

### 生ける人の告別式

またほかの一人に言われた「わたしについて来なさい。」その人が言った、「その前に、父の葬式をしに行かせてください。」その人に言われた、「死んだ者の葬式は死んだ者にまかせ、あなたは行って神の国を伝えなさい。」(ルカ九59～60塚本訳)

世にも不思議な告別式であった。一九八〇年八月三日豊橋市大清水町の村松さん宅で、村松藤枝、平沢弥一郎御二人の告別講演会が、お二人の手で司会され、進行された。参会者は八十数名、大阪、長野、福島、茨城、群馬、栃木、埼玉、千葉、東京、神奈川、静岡等々から、地元愛知を含めて広範囲に亘った。ほとんどが家族ぐるみの出席であった。出席者は、一円の会費も香??も自由献金さえも差出すことなく、二時間余に亘る講演感話を通して、霊の賜物を??れるばかりに頂き、最後の晩さん(昼さん)さえもただで、たっぷり与えられた。

村松さん主筆の「福音にうたう」誌七月号にいう。「私のこの肉体が死んだときは、誰にも通知せず、遺体は直ちに医科大学に運んで頂き、医学の研究材料として使って頂いた後は、大学の納骨堂に納めて頂くよう身内の者に頼んでおきました。」と。

平沢先生は、東工大の教授、昭和三十八年以来雑誌「小使徒」を発行して来られた。二〇五号は告別式特集号、八月三日自らを葬ると共に雑誌を終刊させる御決意で出席された。

世の葬式は、花輪と参列者の数の大きさに目を見はる。マスコミもこれを厳粛盛大な告別式とほめそやす。しかし、一人の人間が、完全にこの世に死にきり、ただキリストのみに生かされて、み国の福音を宣べ伝えるほどに厳粛壮烈な告別式は、これ以外、地上のどこにもないことを知る人はまことに少ない。

村松さんも平沢先生も実行の人である。言われたことは必ず実行される。否、すでに実行せざるを得ない人とせられている。もはや、私たちに、肉の藤枝、弥一郎は無関係となってしまう。彼女と彼が、いつ、どこで、のたれ死にしよう、私たちは涙を流さない。八月三日にすべての涙を流してしまったからである。(半田)

## 第99号 (1980年10月)

### 国家の理想

矢内原忠雄先生が、雑誌「中央公論」巻頭に、「国家の理想」と題して論文を寄せられたのが一九三七年(昭和十二年)九月号であった。論文は、当局の忌むところとなり、直ちに、全文削除処分が付された。続いて、十月一日、東京日比谷市政講堂での「神の国」と題する藤井武七周年記念講演が、直接の引き金となって、先生はついに、その年十二月、東大教授の職を追われることになるのである。

内村鑑三の永眠の翌年から始まった十五年戦争は、ちょうど半ばにさしかかっており、着々と政治の実権を掌握しつつあった軍は、八紘一字と東洋の平和という美名のもとに日本民族を東亜の盟主とする軍政国家の建設に、全国民を総動員しつつあった時である。

この時、一人の矢内原が起って、敢然とこれに抗し、神の正義と人類の平和、そして人間の尊厳と自由のために、すべての民族との和解と提携、その前に個人も国家も悔い改めが必要である。これこそ、国家の真の存立意義であると説いたのである。

靖国神社国家護持法への激しい執着、防衛予算の増大、憲法改正論議の急速な高まりなどと合わせて、最近の政治動向は、まさしく一九三十年代に類似するものがある。

外敵の危機を説いて、国民の意思統一をはかるのは、統制国家の常套手段である。恐るべき敵は、外よりも内にひそむ。

私たちは、いまこそ一人一人が、小さき矢内原となって、わが家庭に、わが村、わが町に、わが愛する日本国に、真の平和をいかにして打ち建てるか、声を大にして、おおいに語らなければならない。

(半田)

第100号(1980年12月)

水無誌第百号記念に当りて

一両手で支える重み一

M生

水戸無教会誌第九十九号を綴り込もうとして、旧号の綴り込みを片手で取ろうとしたが重かったので両手で取り出した。表紙に昭和三十年三月起とあった。二十五年間の綴りの重みであった。然し、その内容は主のいつくしみに依る諸兄弟の信仰の証であり、真理探究の記録であって、これからも永く続けられ、したしく学ばしめられる事であろう。

今年八十三才と六か月になる私は、枯木同様である。然し、全てが主の恩恵に依るというより他はない。それは第四を除く毎日曜集会に出席を許され、本誌グループの諸兄弟より聖書を学び、福音を頂き、信仰を教えられると云うことである。全く何ものにも替え難い賜物である。恰も庭の片隅にある冬木立に燦々と光が注がれて居る様であって、ただただ春を待つものである。

百号の発刊を喜び、心からなる感謝を捧げる。